

3. 平和的手段の限界

ときに紛争を悪化させる

- 人道支援の限界
 - 支援物資が武装勢力に利用される。
 - 無料の食糧が、残存する穀倉地帯を没落させる。
- 調停や和平交渉の限界
 - 紛争当事者は、容易に武力行使を止めない。
 - 表面的な交渉で時間稼ぎを行う。
- 国際刑事司法の限界
 - 訴追しても、強制力がない。
 - 妥協の上で成り立つ平和を壊す恐れがある。

1996- コンゴ紛争(但キンシャサ) 2013年 8月撮影



市内を普通に歩きたかったが、周囲は必死に押しとどめられ、車を離れられなかった。

漁村にて同僚とボートを待つ。この撮影の直後、群衆に囲まれ、連行された。

国営テレビ局。この4か月後、武装集団に襲撃された。

漁村のマーケット。

1992-1995 ボスニア内戦 2014年3月撮影



スタリ・モスト(モスタル)、内戦時に破壊、2004年再建

ソコルル・メフメト・パシャ橋、ノーベル賞受賞作「ドリナの橋」と内戦時の虐殺の舞台

サラエヴォの永遠の炎 (Eternal Flame)

道路から眺めるサラエボ市街地。この道路が最前線であった。

4. 虐殺阻止のための戦争

人道的介入という名の軍事介入 「保護する責任」の提唱

- 人道危機、つまり「他者」の戦争にどうかかわるか？
 - 国際社会は、他国への非干渉を基本原則とする。それゆえ、一般的に介入は悪とされる。
- 人権(or介入する権利)VS国家主権
- 人道的介入(Humanitarian Intervention)の出現
 - ⇒保護する責任(Responsibility to Protect; R2P)に精緻化
 - 国家が国民を保護する責任を果たせない場合、国際社会(the international community)が国家主権を乗り越えて、人々を保護する責任を担う
 - 最終手段として、国際社会は軍事介入する。

よりマシな悪を選ぶ

「怖いね」と言ってディナーを続ける」(映画『ホテル・ルワンダ』)

7. 「正しさ」の揺らぎ

介入の成功は虐殺の消滅、そして介入による犠牲だけが残る

- 不介入の「正しさ」介入による犠牲を避けるが…
 - ⇒しかし**不介入は、虐殺をそのまま放置**することになる。つまり、見殺しにしたという事実が残る。
- 介入の「正しさ」介入によって犠牲を阻止するが…
 - ⇒**成功した介入は、虐殺を未然に阻止する**。その結果、**介入の道義的根拠自体が消滅**する。しかし、介入による**民間人の犠牲は事実として歴史に残る**。
- 国際社会は、介入を批判され不介入も批判され、介入／不介入を**振り子のように繰り返**してきた。

8. 道義的難問(モラル・アポリア)

介入も不介入も、必ず非難される、それでも、選択しなくてはいけない

- 「子供を背負った女性が、子供を背負った女性を殺そうとしているような虐殺の最中において、指揮官はどんな対応ができるのか？ **兵士は銃を撃てるのか？ 誰に対して？**」(ジェノサイドの現場についてのダレールのコメント)
- 「**正しい選択**」を導き出すこともできず、選択に確信も持てない、**だが選択を迫るのが道義的難問(モラル・アポリア)**。

1995 スレブレニツァの虐殺 2014年3月撮影



スレブレニツァの虐殺のメモリアル。発見された犠牲者の遺体が埋められている。

メモリアルの向かいにある工場の廃墟、PKO駐屯部隊の司令部があった

9. 「よりマシな悪」の選択

順位付けし、最悪を避ける

- 眞嶋提案の指針
 - 選択肢の認識
 - 「悪の度合い」によって選択肢を**順位付け**
 - 「最悪」から「最も少ない悪」を特定し並べる
 - その上で、「**最悪**」を**避けることを目指す**
- 大庭提案の考慮事項
 - どんな**選択も悪とされる**こと、を覚悟する。
 - できるだけ、自分がいかなる立場でも、「**最悪**」といえる選択肢を探す。

カンボジアへの軍事介入に反対するベラ・アブザック(Bella Abzug)の論(1975年4月)「もし我々が現地にいなければ大量虐殺(bloodbath)が発生するため、今後も軍事支援をするべきだ」と議論されています。しかし、我々が発見した事実は、現在、我々アメリカの軍事支援があるからこそ発生する、比類なき大量虐殺であります。(中略)もし、我々の軍事支援こそが原因となって、来る3ヶ月以内に命を失い、または障害者になる、と予想される7万5000人、または10万人のカンボジア人をあらかじめ特定してください、と言われたとします。(中略)さらに彼らが、「なぜ私たちが死ななければならぬのですか」、「なぜ、私の身体が切り刻まれる必要がありますか」と、あなた方に対し、質問いたします。いったい何と答えますか。「大量虐殺を回避するため」と仰るのですか。(パロー、サマンサ(2010)『集団人間破壊の時代』(星野尚美訳)ミネルヴァ書房、90頁(原著『A Problem from Hell': America and the Age of Genocide,p.103を参照し、訳文を、一部修正))

※なお、この直後、米軍はカンボジアから手を引き、ポルポト政権が誕生した。そして、ポルポト政権によって、100万とも200万ともいわれる大量虐殺が発生した。

リビア介入に対する英ガーディアン紙の批判(2011年)

「キヤメロンとサルコジは、カダフィー軍がベンガジにおいてスレブレニツァのような虐殺をまさにに行いそうだと、[2011年]3月に安保理から「あらゆる必要な手段」行使の承認を勝ち取った。本質的に、我々はNATOの介入がなかった場合何が起こったのか決して知ることはできない。しかし、実際にそういった虐殺を70万もの人口を抱えた武装した都市に対して、行い能力や意志があったのか、指し示す証拠は何も存在しない。」(Seumas Milne, 'If the Libyan war was about saving lives, it was a catastrophic failure', the Guardian, Wednesday 26 October 2011)

※リビア内戦による死者は5万ともいわれる。介入が70万の虐殺を阻止したとは、誰にも証明できない。そして現在まで、リビアの混乱は続いている。

ルワンダ・ジェノサイドにおけるアポリア

女性や子供がバラバラに切り刻まれるといった住民の虐殺がまさに進行中であり、それでも幾人かが生き残り、助けを求めて叫んでいるような村において、指揮官は何をするべきなのか？ 指揮官は、人口の30パーセントがAIDSに冒されている国において、感染を防ぐための手袋やその他の装備が欠けているにもかかわらず、部下の兵士に対し彼らを助けるよう命令することができるのか？ それ以上に、子供を背負った女性が、子供を背負った女性を殺そうとしているような虐殺の最中において、指揮官はどんな対応ができるのか？ 兵士は銃を撃てるのか？ 誰に対して？ (Roméo Dallaire)

スレブレニツァ虐殺を阻止できなかったオランダ兵士の罪の意識

彼ら[スレブレニツァに駐留していたオランダ部隊の兵士たち]は[NIODの]報告が明らかにした、彼らにはどうしようもなかった事態に対し衝撃を受け、罪の意識を感じるようになった。陸軍のお偉方や政治家が責めを負うべきであり、スケープゴートにされた兵士ではない。正式の確認ではないが、軍を支援するキリスト教団体であるACOM (Algemeen Christelijke Organisatie van Militairen)によれば、**実際、10人**に上る[スレブレニツァに駐屯していた]オランダ部隊兵士が自殺した。また70%が**軍を退役**した。(Isabel Conway, "Dutch UN troops haunted by the shame of Srebrenica", The Independent, 21 April 2002)

シリア内戦と保護する責任

安全保障理事会は国際の平和と安全に対する脅威に対応する力を持っています。しかし、その力は使われていません。国連は、国家がその国民を保護できない場合、国際社会は傍観しない「保護する責任(R2P)」を採択しました。しかし、我々はシリアを傍観しています。問題は情報不足ではありません。我々は、ヨルムーク、アレッポ、ホムスで起こっている耐え難い事実を分かっています。問題は政治的意志の欠如です。我々はシリアを、不決断の廢墟から浮かび上がる悪意を直視できていません。そして、これが無辜の人々の保護に対する国際社会の無能(inability)の底(lowest point)ではないと考えています。私の出会ったシリアの人々の誰もが私以上にこの紛争を雄弁に語ります。ほぼ400万のシリア難民が彼らに関係のない紛争の被害者です。それなのに彼らは避難され、嫌われ、厄介者として扱われています。私は彼らのためにここにいます。なぜなら、ここは彼らの国際連合なのです。何千もの難民が、最も豊かな大陸の入り口でおぼれる姿を目にすることに吐き気を催します。このようなやり方で自分の子供の命を危険にさらすものなどないのです、ありえないほどの絶望でなければ。もしわれわれがこの紛争を終わらせられなければ、逃れようのない難民保護の道徳的責務と安全に対する法的手段の提供を負うことになります。(UNHCR特使アンジェリーナ・ジョリーによる国連安保理での演説(2015年4月24日、国連広報センター訳より転載))

中東のこの状況は、転移の危険のある牆です。このまま続けば制御不能な未来は明らかです。我々の意思とは無関係に、地球規模の危機を増大させます。これを認めるわけにはいきません。この紛争で苦しむ人々への連帯だけが問題ではありません。これは我々自身の根幹、共通の利益に関わる問題なのです。(同上会合での国連難民高等弁務官アントニオ・グテーレスの演説(2015年4月24日、国連広報センター訳より転載))

眞嶋俊造の「よりマシな悪」を考える指針(執筆中の原稿より転載)

・「より少ない悪」
「戦争を考えることによって戦争をなくす」という考えを下支えする考えに1つに、「より少ない悪」という考え方があります。例えば、2つの「悪い行い」があるとしましょ。どちらの行いとも、「悪い」という点では同じです。しかし、それぞれの行いの「悪」の質や量(例えば、強度や規模)は異なってくるかもしれません。ここではその理由について詳細な検討はませんが、具体的な例として、相手に対する傷害行為一般よりも、強姦や拷問の方が「より悪い」という議論は成立します。むしろ、その議論の論理的妥当性と擁護可能性と説得力は非常に高いと考えられます。

・「より少ない悪」という考えが示唆すること
「より少ない悪」という考えは、必ずしも二者択一を迫るものではありません。実際には、選択肢が複数あることの方が多くでしょう。「善」と「悪」と「最悪」という3つの選択肢があった場合、どの選択肢とるべきかについて迷う人は少ないでしょう。むしろ、私たちが直面し、心を悩ますのは、「**退くも地獄、進むも地獄、止まっているのはもっと地獄**」という状況に陥ったときです。もしそのような状況で、どうすべきかという意思決定を迫られ、何らかの行動をとることが迫られるとしたら、果たしてどのような意思決定を行い、どのような選択肢を選び行動に移すべきでしょうか。ここにおいて「より少ない悪」という考え方が生きてきます。

それでは、私たちが地獄の中でも意思決定を迫られる状況において、「より少ない悪」という考え方を取り入れると、どのようなことが言えるでしょうか。まず、私たちの目の前には、とることが可能な**多くの選択肢があることを認識**することから始まります。次に、それぞれの選択肢を「悪の度合い」によって順位付けします。具体的には、「**最悪**」から「**最も少ない悪**」を特定し、並べることができます。その上で、「**最悪**」を避けることを目指します。ここから時間の流れに沿って考えていきましょう。初めで避けるべきことは、とにかく「**最悪**」を避けることです。そのためには、先に順位付けした選択肢の中で「最も少ない悪」を選択し、それを試みることです。もし「最も少ない悪」を選択することによって状況が収まれば、いずれにせよ起こり得る悪を最も少なくできます。しかし、初動における「最も少ない悪」を生じさせる行動が問題の解決に資さない、または効果的ではない場合、次の段階においては、「最も少ない悪」に次ぐ悪」を選択することによって、「やはり「**最悪**」は避けられるのです。ここで注意すべきは、「**最悪の選択肢**」というのは必ずしも行動とは限らず、「行動しないこと」が最悪の選択肢になる場合があるということです。

「より少ない悪」という考えを戦争にあてはめると、次のように言うことができます。「戦争をなくすことはできないかもしれないが、戦争による被害や破壊をなくしたり減らしたりすることはできるかもしれない」と。(眞嶋俊造「戦争と倫理の問一答」(仮題、執筆中)より転載)

選択② 継続、撤退、積極介入

- あなたの国は、某国の国連平和維持軍に部隊(施設部隊)を派遣しています。ですが、某国は再び内戦状態となり、ジェノサイドらしき状況が発生しています。政府は、戦争に巻き込まれることを恐れ、**安全確保のための撤退**を検討しています。治安悪化によって武器使用を余儀なくされると、**自国部隊が誤って無辜の人々を殺傷する危険**もあります。しかし、**部隊の撤退は、なし崩し的に他国の撤退を引き起こし、治安は崩壊しかねません。部隊の増派は、某国の治安確保に貢献しますが、国益にはならず、揉め事に巻き込まれ、自国兵士を危険にさらします**。
- あなたは世論調査で、どの選択肢を取りますか？
 - 現状のまま、部隊を駐屯させる。
 - 部隊を撤退させる。
 - 部隊を増派して、積極的に介入する。

選択③移動、一部移動、死守

- あなたは国連平和維持軍の30人ほどの部隊の指揮官として某国に駐留しています。そのあなたが駐屯している学校に、**2000人もの人々が突然逃げ込んできました**。学校の周囲は、**ナダを持った民兵に囲まれており、ときどき威嚇**てきます。また別の場所にいた**自国兵士10名は、民兵に襲われ惨殺**されたとわかりました。それでも、あなたとその部隊は学校を死守しています。
- 数日後、上級司令部から、あなたの部隊は学校を引き上げ、空港の防備につくよう新たな命令を受けました。
- あなたは指揮官として、どの選択を取りますか？
 - 命令どおり、部隊30名全員で空港に移動する。
 - 命令に背いて10～15名を学校に残し、残りを空港に移動する。
 - 命令に背いて、学校を死守する。

困難な選択に、最後までお付き合いくださり、ありがとうございました。

大庭 弘継 (京都大学)
眞嶋 俊造 (北海道大学)
中村 長史 (東京大学)

本発表は、科学研究費補助金の国際共同研究加速基金「人道的介入の実践における倫理／非倫理の類型化－(奪命の倫理)探求の準備研究(国際共同研究強化)」(15KK0103)ならびに特別研究員奨励費「撤退の意思決定過程」(15J043830)の研究成果の一部です。

使用した写真は、一部同行者が撮影したものを除いて、大庭弘継が現地撮影したものです。